

各 位

昨年末発行の「日本認知症ケア学会誌」に寄稿しました特集論文を送りいたします。浅学な趣を恥じながら、ご笑覧賜いただけますれば幸いです。いささかでも認知症の人や介護家族への理解が広がりますことを念じつつ…。

妻井 令三 (RSK OB)

当事者・家族にとって認知症介護のリスクは…

(日本認知症ケア学会誌 2007 第 6 巻第 3 号)

【英文タイトル】 Dementia: Potential danger for the patient and care family

【名前】 Reizo Tsumai

～執筆余話～

“「日本認知症ケア学会誌」にリスクマネーメントと特集をやりますので、認知症の人や介護家族の立場から見たリスクマネージメントを書いてください”と同誌編集委員長の加藤伸司先生に突然電話で要請されてたじろいだ。

15 年ほど前から認知症に罹患した母親の認知症介護を体験した浅学な介護者に専門学会誌にこの提起は重すぎると即座にお断りした。電話口での逡巡する私の返事に、“それではやっぱりは無理ですか…”と打診がてらで引き下がられる風情は一向に見せられず、「私が全体編集コーディネートの役割をおおせつかっていますので、妻井さんにこの項はお願いしたいと思っています」と言い切られた。

68 才になった足掛け 3 年前に岡山県から強引に推されて、認知症介護研究・研修仙台センターで「介護職員指導者養成研修」第 14 期生として、2 ヶ月余りにわたって受講した際に出会ってご教授頂いた先生は、平素の物腰柔らかかで温厚な話しぶりにかかわらず、決めた事は信念を通す芯の強さがある方だ。心理学者という専門家らしい座標の揺れぬ話しぶりに、いつのまにか“蛇ににらまれた蛙”といった呪縛状態に追い込まれている事に、後になって私はいつも気付くのである。

その電話の一ヶ月後に、「同センター H18 年度研究成果発表会」の実践報告『地域における認知症高齢者の支援』をテーマにしたフォーラムの報告討論者役を先輩研修生から仰せつかって仙台を訪れた際の先生との再会で、「先日お願いいたしました件を是非宜しく願います」と柔らかな口調でもうすっかり決定事項のような言葉が早速あった。「裏づけのない主観論による、問題提起なら…」等と逃げ道を用意しての私の弁明に「それでいいと思いますよ…」と泰然として鸚鵡返しのような仰せに、もう逃げ道は絶たれた気分になっていた。

表題の英文体タイトルは、意見を求めたベルギー在住の次女がフランス人亭主とも話し合っただけの方がいいのではと言ってくれたものに決めたのであるが、こうした経緯を通して子供たちが祖母の認知症介護に関わった私達の遍歴を読み取って、改めて慰労の言葉を送ってきてくれた事が想定外の嬉しい収穫となった。

※昨年は、2 月「介護職員基礎研修テキスト」(長寿社会開発センター刊)、6 月「神経難病のすべて」(新興医学出版) 発刊の本にも分担執筆を頼まれ、忙しい時間を送りました。

本編は下記の URL をクリックして、ご覧下さい。

http://www.geocities.jp/mink_okayama/tsumai_ninch080312_B.pdf